

Title	シェパード・B・クラフ フランスの経済発展における阻止的要因
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.7 (1954. 7) ,p.783(81)- 785(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19540701-0081
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ければならなかつたという事情は、労働階級の生活不安を徒らに深めるばかりであつたのである。海上輸送を妨げる如何なる條件もボルドー市の労働階級にとつて生活の重大な脅威となつていた。第十八世紀を通じて頻發した對外戦争は、かかる妨礙原因のうちでも特に重要なものであつたのである。

第十八世紀に入つてボルドーの労働階級を襲つた最初の生活不安は、實にイスパニア繼承戦争の勃發が直接の原因であつた。輸入の杜絶から食糧は極度に不足し、生活の困窮はユトレヒト講和の成立まで續いたのである。

しかしイスパニア繼承戦争の終結によつてボルドー港は活況を取戻した。そしてオーストリア繼承戦争の勃發當初においてもボルドー港は依然としてその繁榮を持續することができた。しかしイギリスの参戦によつてフランス沿岸の封鎖が斷行されて以來、ボルドー港は衰退を餘儀なくされた。もつともアーヘンの講和條約によつてフランスの西印度領有が確認された時、ボルドー港は再度西印度貿易の一大中心として輝かしい繁榮に向ふことができたのであつた。

しかし七年戦争の勃發を契機としてボルドー港は極端に衰退して行つた。特にゲーデルプ、マルチニークの陥落はボルドー港の貿易活動を決定的に破壊した。商人階級は多く倒産し、労働階級の失業は一般化した。しかも食糧の不足はボルドー全土に及び、生活の不安を一層深刻なものとしたのであつた。

しかし七年戦争の終結によりボルドー港は非常な繁榮期を迎えることができた。ボルドー港の貿易額は一七五〇年の二二、一九五、一六一リールから、一七七〇年には一七〇、八二八、三三三リールに達した。又年々ボルドー港に出入する大小の船は三百隻を越した。ただしこの未曾有の繁榮期においても、一七六六年と、一七七三年とは、天候の不順と配給組織の貧

迫力を持つものではなかつた。實に食糧問題の解決は結局において一七九〇年の豊作にまで持越されなければならなかつたのである。

一七九〇年に一旦解決した食糧問題は、革命政府がオーストリア、プロシアに對し宣戦した一七九二年に、再び重大な社會問題となつた。輸入食糧の杜絶から事態はボルドー市において意外に急迫して來た。市當局は食糧不足の緩和のため隣接諸州から必要な食糧の調達を企圖し、委員を任命して派遣したが、成功は覺束なかつた。現に僅かに一、八〇〇プシエールを獲得できたのみで、勿論これがボルドー市の必要を満たし得るものでなかつたことはいうまでもない。かくしてボルドー市當局はパリの革命政府に對し援助を求めたが、容易に中央の救済を得ることができなかつた。

しかも革命政府がイギリス、イスパニアに對し宣戦した一七九三年以來、食糧の不足は一段と深刻の度を増した。膨大な軍隊の維持のため食糧の徵發が強化されたことは、ボルドー市における食糧の不足を重大な段階に迫込んだ。飢えた市民は市役所に殺到し、食糧を求めて暴徒化する程までに事態は急迫していったのであつた。

かかる事態に直面してボルドー市當局は勿論パリの革命政府に援助を求めた。しかし今度も何等か救済を得ることする出来なかつた。これは市當局を極度に狼狽させた。「パンを下さず、市内には十二萬もの人がいるのです。助けて下さい。見捨てないで下さい」。市當局が熱心に援助を懇願したにもかかわらず、食糧の不足はボルドー市において特に深刻な社會問題となつていたのであつた。

とにかくこのように第十八世紀のボルドーは頻々と食糧不足に見舞われていた。戦争による海上輸送の杜絶が、必要な食糧

書評及び紹介

弱のため深刻な食糧不足が起つてゐる。

一七八六年に成立した對英協約はボルドー港の發展を一層確實なものとした。ボルドー港からロンドンに輸出される葡萄酒の量は増加し、一七八六年の四八〇トンから、一七八七年には一舉に、二、一七二トンにも達した。これによりボルドー市の葡萄酒商が獲得する利益は絶大なものであつたのである。

しかし他方においてこの協約はイギリス工業製品のフランス市場進出を容易にしたものでもあつた。ボルドー市の工業はイギリス工業の敵ではなく、結局において敗退を餘儀なくされた。このため労働階級の失業は一般化し、その生活は困難なものとなつた。しかも一七八八年の不作は労働階級の生活不安を一層深刻なものとした。この時期に顯著な進出を示した商人階級に對し、労働階級の生活はボルドー市において意外に悲惨なものであつたのである。

労働階級の生活不安に對しボルドー市當局はその救済策に腐心した。そしてこの對策として市當局は食糧の無料配給を實施し、又公安の秩序を亂す流言の流布を取締る中央機關を設置した。

他方市民も亦食糧問題に重大な關心を寄せ、その解決のために義勇隊を組織する程に積極的であつた。當時ボルドー市にはかかる種類の義勇隊が十三隊も結成された。この義勇隊は隠匿食糧の摘發に、食糧の對外流出の防止に、パン商人の持つ秤の検査に従事し、食糧問題の公正な解決のために努力したのであつた。市當局も義勇隊のこの積極的な態度に好感を持ち、食糧價格の監視を實行しようという際に義勇隊の援助を求めた。かくして委員が各義勇隊から選出され、直ちに取締活動を開始した。「パン商人は巨大な利益を収めつつある」。しかし委員のかかる報告も、市當局に對し眞に公正な救済策を樹立させる程の

を多く海外に求めていたボルドーにおける食糧不足の重大な原因であつたことはいうまでもない。しかしこの食糧不足を緩和することに對して君主政府も革命政府も全く積極性を缺いてゐた。現實において、困難なこの事態は、平和の到來による海上貿易の再開で解決されるという経過を辿つていたのであつた。

(渡邊 國廣)

シェパード・B・クラフ

『フランスの經濟發展における阻止的要因』
(Shepard B. Clough, 'Retardative Factors
in French Economic Development in the
Nineteenth and Twentieth Centuries',
Tasks of Economic History 1946. pp. 91—
102)

フランスの經濟發展をヨーロッパの他の諸國のそれと比較しても、一八七〇年までは決して遜色がなかつた。しかし一八七〇年以後となると、もはやフランスの經濟發展はヨーロッパの他の諸國のそれと對比ができない。實に一八七〇年を契機としてフランスの經濟上の優位はヨーロッパの他の諸國によつて奪われ、フランスは後進國の地位に轉落を餘儀なくされてしまつたのであつた。

このことは人口・外國貿易・工業生産に起つた重大な變化から容易に察知できるに違いない。人口についてみれば、第十九世紀初頭のフランスの人口が二八、〇〇〇、〇〇〇人。これはドイツの人口と同數、又イギリスの人口の三倍。しかし一八七〇年にはフランスの人口三六、〇〇〇、〇〇〇人に對し、ドイツのそれは四一、〇〇〇、〇〇〇人、イギリスのそれは二六、

〇〇〇、〇〇〇人であり、一九三〇年にはフランスの人口四一、八三五、〇〇〇人に對し、ドイツのそれは六四、四八四、〇〇〇人、イギリスのそれは四四、七九一、〇〇〇人となつた。ドイツやイギリスにおける顯著な人口増加によつて、このように早くも一八七〇年にフランスは第十九世紀初頭の人口上の優位を維持できなくなつてゐた。外國貿易については、フランスの貿易額が革命前はイギリスのそれと同額であつたが、ナポレオン戦争の末期には半減し、他方イギリスの貿易額はこの時期に三倍に増加した。一八八一年から一八八五年にいたる間におけるフランスの輸出額が一九一三年の物價で四二五、〇〇〇、〇〇〇ドルであつたのに對し、イギリスのそれは一、一一三、〇〇〇、〇〇〇ドル、ドイツのそれは五二一、〇〇〇、〇〇〇ドルであり、又一九三六年から一九三八年にいたる間においてフランスは一九一三年の物價で四〇九、〇〇〇、〇〇〇ドルを輸出してゐたのに對し、イギリスは一、二七七、〇〇〇、〇〇〇ドルを、ドイツは一、三三七、〇〇〇、〇〇〇ドルを輸出してゐた。正に外國貿易についてもフランスはイギリスやドイツのたゞに第十九世紀初頭におけるその優位を奪われてしまつたのである。工業生産についても、第十九世紀初頭のフランスは他の諸國を凌駕してゐたが、しかし一八七〇年においては全世界の工業生産の一〇、三パーセントを占めたに過ぎない。これに對しイギリスは當時三一・八パーセント、ドイツは二三・二パーセントであつた。又一九三六年から一九三八年にいたる間の全世界の工業生産高においてフランスの工業生産高の占めた割合が四・二パーセントであつたのに對し、イギリスのそれは九・二パーセント、ドイツのそれは一〇・七パーセントである。第十九世紀の初頭に優位を誇つたフランスの工業生産は、このように早くも一八七〇年にはイギリスやドイツのその前に壓倒

されるに至つたのであつた。人口・外國貿易・工業生産についてみても、とにかくこのようにフランスは、一八七〇年以後においてイギリスやドイツのたゞにその優位を奪われてしまつた。イギリスやドイツが一八七〇年以降において示した急激な經濟發展と比較すれば、フランスのそれは正にきわめて微々たるものであり、フランスは經濟的に後進國の地位に轉落したのである。では何が原因でフランス經濟はこのような停滯を餘儀なくされたのか。フランスの經濟發展における阻止的要因は何か。

一國における經濟的發展がその國の工業化の程度によつて測定され得るとすれば、フランス經濟の發展を阻止した要因は、この國の工業化を妨げた諸原因のうちを求められなければならない。一九一三年になつてもフランスにおいては全人口に比較し農業人口の占める割合が高く、アメリカ合衆國の二十パーセントに對し、ドイツの二十パーセント、イギリスの七パーセントに對し、三十六パーセントで、依然として農業が基幹産業であり、工業は重要な意味を持つてゐなかつたのである。むしろ持ち得なかつたのであり、その原因として種々考えられるが、諸外國の進出による外國市場の喪失・人口の減少による國內市場の狹隘化・増加人口と不釣り合いな天然資源・技術改良における立後れが特に強調されなければならないであろう。このように工業化の規模の大小を經濟發展の尺度と看做し、一國經濟の後進性を低度の工業化に求める場合、工業に雇傭される労働は農業に雇傭された労働よりも生産性が高いということがその前提にあることはいふまでもない。

とにかく工業化がフランスにおいては種々な原因によつて妨得され、到底ドイツやイギリスに對抗することができなかつた。例えばモーターについてみても、一九〇六年にドイツ、イ

ギリスがそれぞれ八、三〇〇、〇〇〇馬力、一〇、八〇〇、〇〇〇馬力のモーターを持つてゐたのに對し、フランスの持つそれは三、六〇〇、〇〇〇馬力であり、かなりの立後れといわなければならぬ。そして正に工業化のこの立後れによつてフランスは經濟的にイギリスやドイツに雇傭を餘儀なくされてしまつたのであつた。(渡邊 國廣)

ダビッド・H・ピンクネイ

『第二帝政下におけるパリに對する移住』

(David H. Pinkney "Migrations to Paris during the Second Empire" Journal of Modern History March 1953 pp. 1-12)

第二帝政下では、人口の都市集中が顯著であり、ために都市人口は膨脹した。特に首都パリで集中が目覺しく、第二帝政に入つて五十萬が殺到した。十八世紀の増加は五十萬にも満たなかつた事實と比較すれば、注目すべき發展であつた。第二帝政下の自然増は十萬に過ぎなかつたから、この首都の人口が第二帝政末に百六十萬人に達し得たのは、實に地方の轉住者に負う。首都パリには、第二帝政時代を通じて各地から移住者があつた。例えばクルーズ縣の轉住者は、大部分が建築労働者として雇傭されてゐた。建築労働者としてパリに出稼ぎに行く習慣は、クルーズ縣で早くから見られ、第二帝政下に入つてこの出稼人の多くがそのまま永住したのであつた。建築労働者としてパリで獲得の出來る賃銀が、一八六〇年には二日六フランにも達した事實こそ、クルーズ縣の出稼人にパリ永住を決心させた原因である。當時クルーズ縣の農業、工業の各労働者の賃銀は、

書評及び紹介

それぞれ一、五三フラン、二、四〇フランに過ぎない。オート・サオーヌ縣の場合、クルーズ縣と違つて、パリに出稼に行く傳統はない。しかし第二帝政下に入れば、パリにおけるより高い賃銀を期待して移住する者が多く、一八五六年の調査によれば、過去五年間に、その人口は、このような移住者のために、出生が死亡を上廻つてゐたにも拘わらず、他の諸縣と比較して最大の減少を示した程であつた。又一八五一年から一八七二年の間では、オート・サオーヌ縣の人口は四萬四千人という顯著な減少を示した。しかし原因は出生を上廻る死亡にではなく、移住者にあつた。しかもこの移住者の大部分がパリに永住した。

セイヌ・エ・マルヌ縣の場合、富裕にも拘わらず、より高い生活を期待して移住する者が多く、第二帝政時代を通じて四萬人がパリに移住した。このため労働力は缺乏し、賃銀は上昇した。しかしパリの賃銀には及ばない。しかもパリには社會施設が完備してゐて、より安定した生活が可能なる條件が出來上つてゐた。經濟的に豊かとはいへ、セイヌ・エ・マルヌ縣の労働者がパリに向つたのは當然であつた。(渡邊 國廣)